

# 留学報告書

2019年8月5日

清水 友登

留学を志願するに至った際に学びたいと思っていた、都市国家、政治、戦略的移民政策などのシンガポールの社会的特色に触れることができた。対して、もう一つの期待していたことである、浸透膜や塩分濃度差発電については接触することができなかった。但し住宅の様相や再生水の利用など、専攻にまつわることは目にすることはできた。マレー語かタミル語を受講したいと思っていたが、定員のため叶わなかった。ただ部活仲間のマレー人と遊ぶことで、重要単語はいくつか覚えることができた。

元々の専攻であった水工学は2学期を通して2講座受講した。学ぶ内容は日本で習ったことがあるものもあったが、英語で学ぶ意義は大きかった。NUSは1つの講座に座学と演習があり、水工学は加えて実験があった。水工学の演習は宿題の答え合わせのような時間だったが、分からない部分は粘って若い先生教えてもらうことができた。NUSの工学部は学部4年間でエンジニアとして社会で働けるように学生を育てる。そのため、講座は設計例題や数値計算までやりこむ内容になっている。日本は理論の概説や法制などを取り扱うため、対比的に感じた。

再生エネルギーの講座では風力や太陽光発電を中心に、様々な再エネを主に技術的、設計の見地から学んだ。グループワーク発表会では潮汐力発電を題材とした。そもそもシンガポールの海はそれに適していないはずだったが、無理やりできることにして発表した。

Faculty of Engineeringの所属ということで向こうへ渡ったが、9つの講座のうち残る6つはEngineeringのものではないものを受講した。院生として研究テーマを持ち込む形で留学すれば、そのテーマに絞って勉強していくことになるだろうが、自分は敢えて学部生のうちがよいと思い留学したので、幅広く勉強することにした。

シンガポール政治の講座では、シンガポールの政治のアウトラインだけでなく、シンガポールの学生が公営住宅や格差問題といった国内の問題やASEAN諸国の情勢にどのような考えを持っているか知ることができた。また、教授の政治学者としての立ち振る舞いや、講演にやってくる与党政治家の質疑の受け答えなどからもシンガポールの政治的空間の感覚に触れることができた。

シンガポールのコミュニティについての講座では、格差社会の現状がテーマとしてよく取り上げられた。日本でシンガポールについて調べたり本を読んだりすると、シンガポールの制度は素晴らしいと持ち上げられがちだが、シンガポールで勉強するとより深い考察や反対意見も見聞きすることができた。また酒が何時までしか売っていないだとか、あのエリアは歩いていても居心地が悪いだとか、生活者としても感じることを講義で得た知識と合わせて、膨らませて考えられることが多くあった。

インド＝シンガポール関係論の講座では、シンガポールにおけるインドエスニシティについて学んだ。講義の一環で、シンガポールのインド人協会SINDAを訪問し、少数派としてのインド人コミュニティがいかにシンガポールで成り立っているか、またインド系の中でもさらにたくさんの分派がある問題があることも知った。また、フィールドワークとしてチャンギ空港や市内のモールに行き、インド人らしき旅行者に声をかけて、どんなところを訪問しているかなどのアンケートを行った。

経済性分析の講義では、未来の金銭的価値は現在のものに比べて割り引いて考えるという概念を中心に、減価償却のような会計処理も合わせて学んだ。プレゼンでは、古くなったHDB(公営

マンション)をリフォームするか、新しめの中古を別に買って引っ越すか、そのまま我慢して住むか、という 3 つの選択肢でどれが最も経済的に安上がりになるかを未来価値と現在価値の差を計算しながら、答えを出すというものであった。社会的割引率の概念は日本に帰ってから卒論で必要になるだろうと思い受講したが、もしかしたら役に立つかもしれない。

プログラミングの講座では C 言語を学んだ。本当の初歩から始まり、自分にはぴったりであった。後半になると複雑でなんのためにそんなことをするのか分からない構文が出てきたりしたが、正しく組むと正解がちゃんと出る世界観が自分には合っているような気がした。他の言語はより簡単だと聞くので、また触れる機会があれば挑戦したい。

ファシリティマネジメントの講座では、ビルやショッピングモールといった施設をどう管理するか、人員配置のレベルから学んだ。経営的側面が強く、自分にとっては専門外でついていくことが大変であったが、そういう考え方で施設を見るという発想が一番の学びであった。